

2024年(令和6年)10月21日

病院長からの一言 遠隔医療センターの設置について

弘前大学医学部 附属病院長 袴田 健一



医師の働き方改革が始まって半年が経過しました。診療科内での業務の見直し、チーム医療の推進や意識改革にご協力いただいた結果、長時間労働が少しずつ正されてきています。医師の時間外業務の抑制は、医師の健康維持だけではなく、業務の効率化による生産性の向上、さらには医師から指示を受けるメディカルスタッフの働き方にも好影響を与えます。タスクシフトを受けるメディカルスタッフの増員計画も進めています。私たちの職場全体の改革が進むことにより、「本院の優れた医療をより多くの患者さんに届ける」との本院のミッションを今以上に果たすことができるものと期待します。

100名程度の医師が兼業として地域医療支援を行っています。その一部を当院からの遠隔診療を行うことで、長距離移動に伴う負担を大幅に軽減できます。働き方改革に寄与するとともに、負担の少ない形での新たな地域医療貢献が可能となりますので、今後多くの診療科での活用が期待されます。大きく変化する社会状況にあって、このような新規技術の導入によって本院の診療機能の最大化と働きやすい職場環境の両立を目指していきたいと思っておりますので、職員の皆様におかれましては引き続きご理解とご協力をお願い申し上げます。

さて、10月1日から中央診療部門の一つとして設置された遠隔医療センターについてご紹介します。本学では、情報通信技術を活用した遠隔医療の推進を大学全体の目標に掲げ、既に遠隔透析管理や遠隔救急診療支援などが導入されています。今年度中に遠隔ICUや遠隔手術も開始されます。これらは主に地域医療を担う医師への診療支援(D to D: doctor to doctor)を目的としていますが、今後は患者さんの直接的な診療(D to P: doctor to patient)にも取り組むこととなります。D to P開始の第一の目的は患者さんの負担軽減です。特定機能病院である本院は広域から患者さんを受け入れています。特に遠隔地から受診される患者さんの長距離移動に伴う肉体的、精神的、経済的負担の軽減につながるものと期待されます。第二の目的は医師側の負担軽減です。本院では毎日

各診療科等の紹介 【輸血部】

本院輸血部は1981年に新設されました。現在は部長、副部長(兼任)1名の2名の医師と、5名の臨床検査技師のスタッフで構成される部署です。部長は、日本輸血・細胞治療学会認定医、自己血輸血責任医師、細胞治療認定管理師資格を、臨床検査技師5名のうち4名は認定輸血検査技師の資格を保有しています。学会の研修制度指定施設(認定医、認定輸血検査技師、学会認定・臨床輸血看護師)に指定され、毎年東北各県から研修を引き受けて活動しています。

前回、「南塘だより」に輸血部が掲載されたのが2008年でした。この15年余の間に輸血医療は大きな変遷を遂げています。当時は、①緊急時のABO異型輸血を行うためのマニュアルの整備、②緊急大量出血時の院内採血(スベンダー血)の適正運用、③輸血後感染症検査の普及、④輸血検査業務効率化、⑤院内の安全で適切な輸血体制の構築等を目標としていました。

上記の課題は、現在は①高度救

命救急センターへの放射線照射済みO型赤血球液の配備により、より迅速な緊急赤血球輸血が可能になりました。②クリオプレシテートの院内調製を開始するとともに、院内にフィブリノゲン製剤を在庫することで、安全性が担保されていないスベンダー血の利用をなくしました。③輸血用製剤の核酸増幅検査技術の進歩により、輸血後肝炎や輸血後HIV感染はほぼ克服できる状態となり、主治医が必要と判断した患者のみ輸血後感染症検査を施行することになりました。④手術用血液は、すべて血液型不規則抗体スクリーニング法(Type & Screen法; T&S法)で準備し、輸血業務は大幅に効率化されました。⑤学会認定制度の認定医



と認定輸血検査技師が輸血部に、院内に多くの学会認定・臨床輸血看護師、学会認定・自己血輸血看護師が在籍して、安全な輸血療法のために活躍しています。

今後も各診療科、診療部門と協力して、院内の安全で適切な輸血療法の遂行に努めたいと存じます。何卒ご指導・ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。

(輸血部長 玉井佳子)

カンボジア脳神経外科学会と(株)Kitahara Medical Strategies International (KMSI) との相互交流に関する協定を締結

本院は、2024年6月6日にカンボジア脳神経外科学会と(株)KMSIとの相互交流に関する協定を締結しました。

協定締結式には、袴田健一病院長、カンボジア脳神経外科学会 Sokchan Sim (ソクチャン シム) 会長、KMSI 石橋千賀代表取締役の代理で、医療法人社団 KNI

北原国際病院 林祥史医師、脳神経外科 斉藤敦志教授らが出席しました。

また、袴田健一病院長から、Sokchan Sim 会長に、本院第1号目となる招聘診療教授の称号が授与されました。

三者はこれまで、カンボジア脳外科学会主催の手術手技セミナーなどで交流してきた実績があり、本協定を契機にカンボジア脳神経外科学会所属の医師に対してオンライン・オフラインでのレクチャーや、本邦での研修を実施予定で、カンボジア脳神経外科学会の正式な教育プログラムとして運用されることで持続的な教育活動を目指します。



招聘診療教授称号授与



関係者で記念写真



協定締結記念写真

先憂後楽

国際医療支援に思う



病院長補佐 斉藤敦志

意志の疎通や共通の目的のために結束する充実感は強く胸に刻まれました。この経験が忘れられず、将来、実力をつけてより深く国際的に医療貢献ができることを目標のひとつに手術を磨いてきたといえます。

今年の1月に大学病院の国際化を使命に、カンボジアの現状視察

の機会をいただき、都市部の急速な経済成長やインフラの整備状況に驚かされました。各国の医療支援が進み、病院数は増加し、MRIなどの診断機器も充実していましたが、患者の増加とともに診断はできるが治療ができない、現地医師のもどかしさも目の当たりにしました。カンボジア脳神経外科学会も設立され、会員も30名を超えていましたが、脳神経外科の得意とする顕微鏡下手術の教育が特に遅れていること、富裕層の国内の脳神経外科症例が隣国のタイやマレーシアに流出している現状も大変、気になりました。同じ危機感カンボジア脳神経外科学会も抱いており、2月に顕微鏡下手術技術の向上を目的とした手術手技セミナーを外科学会に併設して開催いただく機会をいただきました。20名程度の若い脳神経外科を志す医師が、首都のプノンペン

だけでなくカンボジアの各地から集まり、バイパスや脳動脈瘤 clippingのセミナーを熱心に受講してくれました。6月には巨大聴神経腫瘍の摘出と硬膜動静脈瘻の現地での手術指導の機会に恵まれました。参加医師の目の輝きから、私が15年前に感じた充実感が再びこみ上げてきました。袴田院長のご指導の下、大学病院とカンボジア脳神経外科学会のMOU締結に至り、現地での手術指導の道が開かれたことにあらためて感謝致します。

当院の国際化は、医師による医療支援に留まらず、看護師さんや技師さんなどの医療スタッフ、事務の方々の海外視察を始めとして、双方向の交流にこれから発展していくことが期待されます。“国際化”や“海外”という言葉の魔力は、新しい自分との出会いを誘っているのかもしれない。

現在、大学病院の国際化推進委員会と医学部の国際交流委員会の仕事に従事させていただいております。私は、医師になる以前より国際医療支援活動に興味を持っておりましたので関心領域で仕事をいただいておりますことに心より感謝いたしております。この領域は、海外の医師や医療スタッフとの出会いはもちろんですが、袴田院長をはじめとする国内の海外経験が豊富な先生方との出会い、視野が広く仕事に前向きな事務の方々との出会い、これからの医師の活動に夢を見ている学生との出会いにも恵まれております。広い領域の方々との出会いを通して、私自身も成長させていただきながら今後の展開に希望を持っております。“国際化”や“海外”という言葉には、何か広い世界への憧憬や、現状の変化を感じさせるものがあり、新しいものに向かって自

分を大きく強く変えてくれるような魔力を秘めているようにも感じています。現実逃避ではありませんが、現状打破のための大きな刺激に溢れていて、わくわくするような新鮮な気分をもたらしてくれます。

私の最初の国際医療支援活動は、15年前のカンボジアでのボランティアに始まります。日本医療開発機構を通じてカンボジアの脳神経外科診療において医療資源が不足している現状を知り現地に向かいました。当時は、脳神経外科学会も発足しておらず、脳神経外科医と名乗る先生は国内に3名程度で顕微鏡下手術はほとんど行われておりませんでした。急性硬膜下血腫の緊急症例に対して、若いモチベーションの高い外科医と手術をさせていただき貴重な経験ができました。この手術を通して、海外の医師との手術を通じた

プロの音楽家による院内コンサートを開催

本院では6月7日、入院患者さん限定の院内コンサート「名曲の花束」を開催しました。このコンサートは来年青森県内で開催される「青い海と森の音楽祭」に向けたアウトリーチのひとつとして、「音楽に触れる機会の少ない方々に音楽を届けたい」というプロの

音楽家の方々のご厚意により実現したものです。

ご出演されたのは、日本を代表する音楽家であるバイオリンの矢部達哉さん、ピアノの横山幸雄さん、五所川原市出身のソプラノ歌手 隠岐彩夏さんの3名で、バイオリンの矢部達哉さんはNHK連続テレビ小説「あぐり」のテーマ曲「素晴らしき日々へ」を演奏されたご本人であり、生演奏が聴ける貴重な機会となりました。

他にもマスネ作「タイスの瞑想曲」、ショパン作「子犬のワルツ」と「英雄ポロネーズ」が演奏され、また、ドヴォルザーク作「我が母が教えたま



院内コンサートの様子

いし歌」、映画「紅の豚」の挿入歌 加藤登紀子作「時には昔の話を」、映画「オズの魔法使い」の主題歌であるアーレン作「虹の彼方に」、木下牧子作「竹とんぼ」では隠岐彩夏さんの美しいソプラノの歌声が会場となった中央待合ホール内に響き渡りました。

会場には入院患者約70人を含む約110人が集まり、プロの音楽家によるクラシック音楽や映画音楽の名曲に聴き入り、大きな拍手が贈られていました。(医事課)



矢部達哉さん(左)、横山幸雄さん(中)、隠岐彩夏さん(右)

弘前大学表彰を受賞して(DMAT)

2024年6月3日、令和6年能登半島地震における弘前大学医学部附属病院災害医療支援チーム、DMAT (Disaster Medical Assistance Team) と JRAT (Japan Disaster Rehabilitation Assistance Team) が弘大表彰をいただきました。今回の弘前大学 DMATチームは1月7日から10日までと16日から27日まで延べ5隊が活動しました。第1次隊の診療は夜間に訪れたコロナやインフルエンザ感染症の治療が主体でその後は珠洲地域から金沢への患者や施設入居者の搬送、医療チームの統括などでした。能登半島地震の現地医療チームとしての活動について表彰をいただいたわけですが、各チームの活動は、これを支えていただいた(例えば準備や勤務の振り替え、DMATでは車両運搬など)いろいろな方々のバックアップがあって初めて成り立ったものであり改めて感謝申し上げます。

病院に集中し、もし平時の医療が提供できたなら救われた命が500程度あった可能性が指摘されて、災害拠点病院、DMAT、EMIS (Emergency Medical Information System)、自衛隊機を用いた広域搬送などが整備されました。2011年の東日本大震災でなるべく早期に現地で救急救命医療を提供する、が中心の考え方は発災後に長期にわたって発生する災害関連死は防げないことが明らかとなりました。急性期救急医療のみならず、避難所での通常医療の提供や心の支え、高齢者ではリハビリも重要であり、急性期から慢性期にわたって種々の医療提供の必要性が認識されるようになりました。

やっと日常に近い生活が取り戻せるようになった矢先の9月の水害は、どれほどの影響をもたらしているか想像を絶するものがあります。心おれずに復興いただくことを願うばかりです。今回は医療チームが弘大表彰をいただきましたが、災害時には医療だけで支え



られるものではなく、防災や災害からの復興におけるたくさんの領域からのアプローチが必要です。これからの備えて大学全体で防災や復興に関する取り組みが根付いていくことを願っております。(高度救命救急センター センター長 花田裕之)

災害医療の大きな枠組みは、1995年の阪神淡路大震災での教訓を基に作られてきました。多くの患者が被災地域の限られた



弘前地区消防事務組合との大規模災害等における連携協定を締結

本院は、2024年7月3日(水)に、弘前地区消防事務組合と大規模災害等における連携協定を締結しました。

本協定は、石川県能登半島地震の被災地へ弘大病院のDMATが派遣された際に、救急車で移動に関して発生した様々な課題を、両者間で共有したことを契機として締結されました。

協定には大規模災害等へのDMAT派遣時に救急車及び救急救命士が帯同することや、同組合管内で発生した局所的な災害に弘大病院の医療チームが出動すること、平時から様々な研修及び訓練を共同で実施することで救急医療体制の充実強化を図ることなどが盛り込まれています。

締結にあたって、同組合管理者である櫻田宏弘前市長から、「大規模災害の応援体制や弘前管内での救急体制について、さらなる充実強化を進めていきたい。」旨の

挨拶がありました。引き続き、袴田健一病院長から、「これまで培ってきた協力関係や信頼関係を本協定によってさらに深め災害医療に貢献していきたい。」旨の挨拶がありました。

締結式には、同組合から管理者である櫻田宏弘前市長、中村康司消防長の2名が、本院からは袴田病院長、花田高度救命救急センター長の2名が出席しました。

本協定を契

機に、これまで培ってきた救急医療における連携関係を災害医療にまで発展させ、有事の際の対応能力を両機関が平時から教育・訓練を行うことによって強化していきます。(医事課)



この度、2024年能登半島地震におけるJRAT活動に対し弘前大学表彰を受賞いたしましたことをご報告させていただきます。南塘だより第113号において、自身のJRAT派遣に関するご報告をさせていただきました。その後、青森県災害リハビリテーション連絡協議会(青い森JRAT)として、2隊10名が派遣となっております。派遣地域は2隊ともに珠洲市で1隊は2月25日から29日まで、もう1隊は3月10日から14日の派遣となりました。派遣された時期には珠洲市は断水が続いており、宿泊は珠洲市総合病院のリハビリテーション室を使用させていただきました。珠洲市内での活動内容は、避難所での生活不活発病予防としての体操指導、杖や車椅子等の歩行補助具の調整、トイレの手すり調整や段差への滑り止め設置などの環境調整など多岐に渡る活動を行いました。

珠洲市内は道路状況も改善しておらず、倒壊した家屋の片付けもほぼ行われていない状況でした。また、沿岸部では津波の被害がはっきりと残っており、流された船や自動車などもそのまま残っている状況でした。青森県では石川県よりも高齢化率が高く、同様な地震が発生すると避難所へ避難

する高齢者が増加すると予想されます。そのため、青森県での災害リハビリテーション体制に関して更なる準備をする必要があると痛感致しました。現在、青森県と連携を行い、研修会の開催や協定締結へと向けた準備について進めている最中です。今回の派遣を許可いただきました袴田病院長をはじめ、リハビリテーション部の津田部長、リハビリテーション部のスタッフには感謝申し上げます。今後も病院関係者の方にはお世話になることが多いと思いますが、JRAT活動に関してご支援をいただけると幸いです。(リハビリテーション部 療法士長 西村信哉)



弘前大学医学部附属病院へのご寄附、心より御礼申し上げます

お名前掲載をご承諾いただいた方に限り、ここにご芳名を掲載させていただきます。今号では、令和6年5月から令和6年7月末までの間にご入金を確認させていただきました方を公表させていただきます。(経理調達課)

寄附者ご芳名

- 長谷川 トモ子 様 ○乾 明成 様 ○藤本 輝子 様 ○高橋 弘一 様 匿名希望 5名

※掲載の同意をいただいた方以外は、匿名希望とさせていただきます。

【編集後記】

猛暑だった今年の夏はようやく過ぎ去っていきりましたが、台風や洪水など身近に自然災害といった大きな爪痕を残していきました。被害に遭われた方には心よりお見舞い申し上げます。さて、本号記事で国際交流の話題が掲載され、執筆現在には台湾の借醫學院より医学生を迎えています。今、大学や大学病院は国際化を求められています。一方地域医療を支えていく重要な役割を求められています。そういった中、「魅力のある」附属病院にするには、過去を尊重しつつも未来に向かって何をすべきか、秋の夜長に月を眺めながら一人一人が考えるのも「おもむき」があるのではないのでしょうか。なにか「お月様」がヒントをすこし与えてくれる気がします。(病院広報委員会委員 藤田征弘)

●●● 研修医のひとりごと ●●●

臨床研修医 2年目 青木 香子



生きてきた自分にとって、医師の世界は目まぐるしく、着いていくことに必死な毎日です。しかし、そんな中でも心根の優しい同期に恵まれ、苦しくも楽しい実りある1年となりました。

2年目となり大学に来てからはより専門的な症例が多く、勉強会等も頻繁に開催されており、環境の変化に何とか喰らいつき日々研鑽中です。地域医療研修では石澤内科胃腸科にお世話になり、患者さん一人一人に寄り添う医療体制や、介護を含めた連携がいかに必須なのか等、あたたかい医療とは何かを考える良い機会となりました。私生活は、小学生の時からは

けている、現代風に言うところの“推し活”で充実しています。担当が雑誌の表紙を飾る、担当がCDを出す、担当がテレビ番組に出演する、etc…。慌ただしい研修生活でも、自分を見失わずにいるためには“自担”という大黒柱は必要不可欠ですね。

最後になりますが、こんな私も来年からは3年目となり、研修医を離れ一人の医師として見られる機会が多くなると思います。いつでも謙虚に、感謝と礼儀を忘れず、日々笑顔の精神で努力してまいります。ご精読ありがとうございました。